



期の琳派とも異なる。滲む墨を固定する明治期からの日本画、江戸期までの文人画、いずれも似て非なる存在だ。それだけにгентクは分類不可能である。

гентクは 1958 年山形市生まれ、1990 年に武蔵野美術大学建築学科卒、80 年代に現代美術の領域で活躍、1999-09 年、中国古代文字をモチーフにした創作活動を行う書団体「亀甲會」に在籍し作品を発表。今回が初個展、各種の紙に墨の作品が 16 点、壁面を飾る。

書と言えば文字を画くことであり、書画一体の思想から山水などを描くこともあり得る。この潮流に対して前衛書画を嗜む傾向も見られるが、гентクは単なる前衛書の動向とは一線を画す。

展示風景を見るとわかるように、гентクは軸仕立、パネル張、アクリル使用と様々な装丁を用いている。これは単に自己の筆に対して自信があることを示すのではなく、かといって現代美術的な素材の探求とも異なる。それは見せ方の問題ではなく、在り方の問題なのだ。

гентクが自らの作品を「墨蝕・墨画」と呼んでいるように、確かに墨が和紙に侵食する感じは、余白を白く塗り、オールオーバーな技法を施すアメリカ抽象表現主義とも、ポーリングではなく垂らし込みをコントロールする江戸

描かれている内容も、東洋三遠を用いた東洋画とも非なり、かといって、具体物を抽象的に崩す作業を行っている訳でもない。画面上で遊ぶこともなく、一枚のタブローを描こうとしている。



西洋タブローは、西洋長編小説と流れを同じくして、壮大な物語を語りつくそうとした。それはマーラーの交響曲のように、実現が不可能なまでの存在と化した。

гентクの一枚の作品がタブローなのではない。異なる角度からгентク作品を見ると、墨の色が多様に発光する。我々はгентク作品から、自らの長大な物語を見つけなければならない。それが現代に生きる自己の姿なのだ。

